

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1991(H3).2.13	都北新聞	リサイクル自転車売り出す／8千5百円まず50台／シルバー人材センターが窓口／自転車商組合も協力	北区シルバー人材センターが中心となって3月からリサイクル自転車を売り出す。北区は昭和58年「自転車の放置防止に関する条例」を制定、引き取り手のない放置自転車を処分していたが、資源保護、再生利用の世論が高まる中、「放置自転車リサイクル事業実施要綱」を策定、自転車商組合とも協議を重ねて実施に踏み切ったもの。
1991(H3).3.・	北区女性だより「アゼリア」第3号	北区にリサイクル事業担当～リサイクル文化の創造をめざして～	北区は基本計画において「リサイクル文化の創造」を掲げ省資源の条件下でも真に豊かな生活を送れる道を追求めてきた。区は新たな推進体制の一環として平成3年1月1日から区民部に「リサイクル事業担当」を設け積極的な取り組みを始めた。平成3年度の主な事業は①リサイクル活動の実態調査、②リサイクル活動のPR、③リサイクル活動に対する支援事業
1991(H3).6.15	朝日新聞／読売新聞／東京新聞／産経新聞／毎日新聞	雲仙の子らに見舞金／雲仙被災地に義捐金続々／雲仙被災地に見舞金続々贈る／北区の主婦らも島原の子に／雲仙被災地へ見舞金／被災の雲仙に支援続々	北区生活学校と北区婦人団体連絡協議会は牛乳パックの回収で集めた5万円を日本赤十字社を通じて雲仙の噴火で被災した子供たちに贈った。「私たちが地球に出来ること」を合言葉に、昨年11月から回収をはじめ3枚1円で業者に引き取ってもらい、これまで15万枚が集まった。使い道を話し合った結果、島原の子どもたちに贈ることになったもの。
1991(H3).7.25	毎日新聞	リサイクル活動の担い手…リサイクラー／北区の造語—はやるかな？	北区は22日「リサイクラー制度」を発足させた。リサイクラーは一般公募で住民、廃品回収業者、地元企業の代表など34人に委嘱された(座長は主婦・竹腰里子さん)。造語の“リサイクラー”について委嘱された当人たちは「違和感があった」「すっと頭に入り説明もいらない」など様々。発案者の区民部副参事の澤田和子さんは、この新語の普及に意欲満々。
1991(H3).7.28	都北新聞／サンデータイムス	リサイクラー会議が発足／地域リサイクルの担い手で／全区的推進会議に向け活動／北区でリサイクル活動推進／リサイクラー制度が発足	北区は今年1月、リサイクル事業担当組織を発足させ、区民とともに築く「リサイクルのまちづくり」に取り組み始めたが、その一環として「リサイクラー会議」を設置、22日北とびあで委嘱状交付式を行った。このあと開かれた第1回会議では「資源ごみ回収システム検討部会」「エコ広場活動推進部会」「リサイクル情報ネットワーク部会」を設けて計画づくりや活動に参画することを決めた。
1991(H3).7.31	読売新聞	廃棄物の再利用促進に「リサイクラー」制度～北区に登場～	このほど北区に二十三区で初めてという「リサイクラー」制度が誕生した。今後は「リサイクル活動区民会議」も設けて話し合いの輪を広げていく方針。初会合で北本正雄区長は「区民、企業と行政が一体となった取り組みが、真の区政の推進を可能にする」と挨拶して協力を呼びかけた。
1991(H3).8.・	都北新聞	集めたアルミ缶1トン／募缶運動で車イスを贈る会	平和祈念週間事業リサイクル活動の一環として「情熱募缶運動」が展開された。圧巻は滝野川1～7丁目を主な活動地域としてアルミ缶回収事業を行っている車イスを贈る会が集めた5万個を超える缶の山。北とびあ前の広場に千葉市清掃局から応援に駆け付けた缶つぶし車「パッケンカー」につぎつぎ吸い込まれてきた塊は約1トン。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1991(H3).9.1	朝日新聞	リサイクルで雲仙支援	北区のリサイクル活動の一環として区民らで7月に組織された「リサイクラー会議」(竹腰里子座長)は、回収したアルミ製空き缶の販売収益金18万535円を雲仙・普賢岳噴火の被災者への見舞金として日赤東京支部北地区長の北本正雄北区長に寄付した。空き缶は8月6日から10日までの平和祈念週間の行事に参加した区民に呼びかけ約1万個を集めたもの。
1991(H3).9.8	北区新聞	雲仙見舞に18万余円…空き缶の収益金を贈る	北区リサイクラー会議座長竹腰里子、エコ広場部会長桑原淳子さんらは、8月29日北区役所に北本区長を訪ね、雲仙被災者見舞金として18万535円を寄託した。
1991(H3).9.8	北区新聞	踊り、唄、パレード、即売会など／リサイクル関連の催しも／区民まつり…具体的な計画きまる	区民まつり実行委員会は、きたる10月19、20日に開催する「第8回ふるさと北区、区民まつり」の各種行事内容を固めた。とくに今年は“リサイクル元年”と銘打って2日間とも中央会場で衣類、おもちゃ、雑貨などの生活用品活用市や缶つぶし機による実演などを開くほか、各部会でもそれぞれりさいくるに関するものを取り入れて啓蒙をはかる。
1991(H3)・・・	毎日新聞	小さな水族館～大きな役割／空き教室利用して5年—北区立赤羽台西小—／自然の大切さ学んだ／荒川水系の魚30種300匹	北区立赤羽台西小学校で空き教室を利用したミニ水族館が満5年を迎えた。水族館は1986年10月、魚好きの長峯嘉之教諭が自分で採った荒川の魚を水槽に入れて廊下に展示したのが始まり。都市河川・荒川への理解を深めることを狙った試みだった。翌年1月、長峯教諭が急性肺炎で47歳で急逝したが子どもたちはPTAのバックアップを受けて「ながみねミニ水族館」を守っている。
1991(H3).11.12	毎日新聞	「環境保護」…私たちも実践／新聞よみ関心高まる—東京都北区紅葉中—／文化祭でテーマ発表	「私たちが環境保護で何ができるか」。生徒会のこんな問いかけから学校全体で環境揉んでいにとりくむ実践が始まろうとしている。新聞記事を切り抜き学んでいくうちに環境への関心が高まり生徒総会での決議を経て文化祭のテーマとして研究発表・展示を行った。教育委員会が環境副読本等を作るケースは多いが、生徒会が自主的に取り組む同校の例は一つのモデルケースになりそう。
1992(H4).1.17	都政新報	リサイクル推進区民会議を設置—北区—	北区は14日、リサイクルシステムのあり方を探る区民参加の区長諮問機関「北区リサイクル推進区民会議」を設置し、委嘱式を行った。同区では昨年、リサイクル事業担当の課長級ポストを新設しており、今回の区民会議の設置は区民と産業界、行政が一体となって、区におけるリサイクル施策のあり方を検討する。予定では、3月下旬には中間報告をまとめ4月に最終報告を答申する。
1992(H4).1・・・	北区新聞	リサイクル推進区民会議発足／「北区リサイクル活動の指針」など協議	北区は1月14日「北区リサイクル推進区民会議」を発足させ、同委員に学識経験者、地域団体代表、産業界代表、東京都清掃局、北区リサイクラー会議代表の20人を委嘱した。同区民会議は、北区におけるリサイクルシステムの構築に向けて①北区が進めるリサイクル推進計画②同推進事業について検討し今年度末までに区長に提言する。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1992(H4).6.11	朝日新聞／産経新聞 ／東京新聞	リサイクルシンポ開く／環境問題をもっと真剣に… エコライフ宣言／行動計画に15項目…北区でエ コライフ宣言シンポジウム	北区と北区リサイクル推進区民会議が10日、北とぴあで「北区エコライフ宣言シンポジウム」を開催した。今後のリサイクルへの取り組み指針となるエコライフ宣言がまとまったことから企画された。宣言は「三つの視点、十五の行動」がキャッチフレーズで、住民自治の原点や環境破壊商品を売買しないことを謳っている。
1992(H4).7.14	産経新聞	リサイクル政策などに質問集中…北区で区政討 論会	区民の声を行政に取り入れる北区の「区政を話し合う会」が13日、北区役所で行われた。今回は12月に素案が策定予定の第三次北区基本計画がテーマに選ばれた。区からは北本区長らが出席、住民側は自治会や老人クラブの代表36人がい意見を述べた。とくに、高齢化社会への対応やリサイクル政策に質問が集中した。
1992(H4).8.19	朝日新聞	剪定した公園樹のチップや落ち葉―緑のリサイク ルで腐葉土／地下「室(むろ)」の断熱効果活用／ 北区が年内に施設／年間9400立方メートル処 理／土壌改良に使用	施設は十条台の区立中央公園内のテニスコート横に建設される鉄筋コンクリート造り地上一階地下一階。約8千7百万円かけ年内に完成させる。「室」は地下室や二重構造の部屋を作って外気を遮断し一定の室内温度を保つ伝統的工法。一年間で大量の剪定樹や落ち葉の3分の1にあたる9千4百立方メートルを処理して公園の土壌改良剤に使う計画。
1992(H4).9.27	東京新聞	第二次北区リサイクラー会議が発足	北区の地域リサイクル活動の担い手ネットワーク「第二次北区リサイクラー会議」が発足した。メンバーは応募した区民、企業人20人と地域団体から推薦された18人で座長に田中常隆(日乃本錠前社長)を選出した。
1992(H4).11.19	読売新聞	全校でリサイクル回収／空き缶1年分、業者へ／ 北区紅葉中	新聞記事を教材に環境問題を学び、リサイクル運動を実践してきた北区立紅葉中学校が18日、1年分の空きアルミ缶を回収業者に引き渡した。同校では、昨年秋の文化祭で環境問題を取り上げたのをきっかけに12月から月1回アルミ缶の回収を始めた。1キロあたり50円で、収益金は生と会で話し合って福祉団体に寄付する予定。
1992(H4).11.24	産経新聞	270団体をネットワーク化／北区・リサイクラー会 議／回収事業2年目に	北区では、自治会やPTAなど約270団体がリサイクル活動を行っているが、バラバラに活動するこれらの団体をネットワーク化し、資源の回収やイベントなどを展開することを目的に昨年からはじめた「リサイクラー会議」。第一期のメンバーがこのほど卒業、同時に第二期のメンバーによる会議が組織された。
1993(H5).1.11	自由新報	住宅・リサイクル・駐車問題…三課題の対策と計 画／北区長・北本正雄…山積する課題を解決(年 頭挨拶)	昨年暮れに北区議会に説明した「第三次北区基本計画(素案)」内容の一端を紹介する。<リサイクル対策の推進>①「ビン・缶の集団・拠点回収」を平成7年度には全句に拡大する。②「リサイクル活動拠点の整備」については「エコ広場館」を地域の拠点に「エコライフ総合センター」を総合的な活動拠点として計画化する。3月には計画を先取りし仮称富士見橋エコ広場館の建設を開始する予定。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1993(H5).2.11	都北新聞	リサイクル活動感謝の会／123団体・個人に感謝状	北区と北区リサイクル推進区民会議(委員長＝長幸夫前東京外国語大学学長)の共催による「リサイクル活動感謝フォーラム」が2月6日、北とびあさくらホールで開かれ、35団体、34個人に区長感謝状、31団体、23個人に委員長感謝状が贈られた。リサイクラー活動機構関係者では、竹腰里子、菊池隆重、鰐淵順一郎、桑原淳子、飯島昌之の各氏が区長感謝状、長谷川和子、阿部一男氏らが委員長感謝状をうけた。
1993(H5).2.13	都北新聞	好評ステーション回収／地域のリサイクルの柱に／平成7年メドに北区全域で	北区リサイクル生活課は昨年3月から出張所単位の町・自治会連合会の協力を得て「ステーション回収(びん・缶)」の運動を進めているが、平成4年度4地区で実施され、平成7年度までに区内19ヶ所の全地区で完了する見通しとなった。ゴミの発生(消費)―使用者の協力(びん・缶分別)―回収―有価物への資源化・加工―資源の流通―直納業者―再使用・再利用(産業界の資源回収)をベルトコンベアに乗せる試みが発見する。
1993(H5).2.21	朝日新聞	省エネリサイクル施設「エコー広場館」憲節へ／天の恵み地の利生かせ～風車で発電・太陽光発電／電気は5%自前～汚泥再生レンガも敷石に	切通しで風が強い地形を利用してエネルギーを作りだそう―北区は来月から、屋ののてっぺんに風車をつけて電気を起こす省エネ施設「富士見橋エコー広場館」を田端五丁目に建設する。ソーラー発電や下水の汚泥でできたレンガも使用するリサイクル推進施設。23区の公共施設で風力発電やソーラー発電を使うのは初めてだという。鉄骨二階建てで、延べ約530平方メートル、総工費2億3500万円余、完成予定は来年1月。
1993(H5).3.6	朝日新聞／毎日新聞／読売新聞／日経新聞／都政新報(3.12)	空き缶食べちゃうぞ／空き缶専用の回収車を導入―北区―／空き缶回収車の発進式／空き缶プレス機械搭載…リサイクルカーを導入―北区、自治会などに派遣―／飲料容器リサイクル…北区でプレス車完成	東京都北区は5日、亜紀菅野プレス機械を搭載したリサイクルカー「サンクル号」を導入した。サンクル号のベルトコンベアに空き缶を乗せると、磁石がアルミ缶とスチール缶を自動的に選別。アルミ缶は140缶(3キロ分)、スチール缶は200缶(8キロ分)たまった段階でそれぞれプレス処理されブロック状になって次々と出てくる。初めての出番は花見時の飛鳥山公園の予定で、その後はリサイクル運動に取り組む学校や商店街に派遣される。
1993(H5).3.8	都北新聞	空き缶回収にひと役…「サンクル号」の発進式	空き缶プレス機械を積んだ2トン積み資源回収車「サンクル号」の発進式が5日、北区役所前庭で行われた。埼玉県川口市、大阪府吹田市とともに農水省の飲料容器リサイクルパイロット事業実施自治体に選ばれた北区が、同省の補助金で購入した第一号車で愛称の語源はサンフラワー・リサイクル。発進式には北本区長、高木議長、長幸夫北区リサイクル推進区民会議委員長らが参加して除幕を行った。
1993(H5).4.6	産経新聞	田端にリサイクル活動の拠点／「省エネ情報」を区民に提供／「富士見橋エコー広場館」来年1月オープンへ	太陽光発電や風力発電などリサイクルに関する様々な実験を行う「富士見橋エコー広場館」が来年1月、北区田端5丁目にオープンする。今後のリサイクル活動の拠点となる施設で、主な活動メンバーは、北区のリサイクル施策を審議する「北区リサイクラー会議」の構成員や区民。区の澤田和子リサイクル生活課長は「ただ単にボランティア活動で終始しないように経済団体とリンクした活動を実施していきたい」と話している。
1993(H5).4.25	北区ニュース	リサイクル活動を通じて考え始めた環境問題<リサイクル活動>―北区立紅葉中学生会―	紅葉中学にリサイクル活動の種がまかれたのは今から2年前、当時3年生だった生徒会本部役員は、文化祭委で環境問題についての舞台発表を行い生徒たちに向けてリサイクル活動の提案をした。そして、その年の後期から実際に回収活動が始まった。空き缶や牛乳パックを回収して業者に引き渡すといった活動は、ともすれば回収量など表面的なことに目が行きがちで長続きしないもの。活動の継続に意欲を見せる姿を見ると、今後の地球を考えるうえでの広義な意義を感じ始めているように思われる。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1993(H5).5.1	朝日新聞	花見で空き缶34万個	北区の飛鳥山公園で花見客が捨てていったアルミ缶が34万個になり、回収にあたった「北区リサイクラー活動機構」(竹腰里子代表)などは、押しつぶした缶を展示した。同公園はサクラの名所。同機構はサクラが開花し始めた4月2日からゴミ箱の空き缶はもちろん、植え込みなどに捨てられた缶を一つずつ回収した。展示された空き缶は幅10メートル。業者に売却して車いす4台を購入、区内の特別養護老人ホームに贈る予定だという。
1993(H5).6.・	朝日新聞	古着を細く裂いて糸に／伝統の裂織にリサイクルの光／米国で展覧会—生活の知恵に共感広がる	古着などの布を細く裂き、それをねじり合わせて作った糸で織る、日本伝統の織物「裂織(さきおり)」)。かつて普段着や農漁業の作業着として使われていた着物を集めた展覧会が米国サンフランシスコの工芸民俗博物館で開かれている。今回の企画には東京在住の画家・吉田真一郎さん(45)が所蔵のコレクションから60店ほどを出展。庶民の習慣にリサイクルの視点から光が当てられ時代と国境を越えた共感を呼んでいる。
1993(H5).8.8	毎日新聞／読売新聞	リサイクルでフォーラム—北—／リサイクルテーマにフォーラム	資源リサイクルと環境保護のあり方を考えるフォーラム「北区リサイクルはこうやって進める」が7日、王子駅前の北とびあで開かれ、区民ら150人が参加した。厚生省の「ゴミ減量化を語る女性の会」座長の松田美夜子さんが、ドイツでは空きびんや空き缶の回収や環境教育が徹底していることを基調講演で指摘。パネルディスカッションでは、リサイクル型社会の実現のために住民、行政、企業が一体となる必要があることを話し合った。
1993(H5).12.8	日本経済新聞／産経新聞(12.27)	リサイクル拠点—北区が来月開設／「りさいくる達人」も募集／エコ広場館が完成／北区民のリサイクル活動の拠点	東京都北区は94年1月下旬、田端5丁目に地域リサイクル拠点として「富士見橋エコ広場館」をオープンする。資源ストックヤードを設置、回収した紙などリサイクル資源を一時保管するとともに、不用品の修理・販売やリサイクル情報を提供する。リサイクル拠点を作るのは23区では目黒区に次いで2番目。区は同館の開館に先立ち、家具や傘などを修理する技術を持った「りさいくる達人」を募集している。
1993(H5).12.24	読売新聞／産経新聞(12.23)	北区の印刷屋さん→ネパールの子供たち／ノート3万冊贈る／残紙を有効活用／識字運動後押し／再生紙ノートなどネパールの子供に／都印刷業組合など	都印刷業組合北支部と北区リサイクラー活動機構は、再生紙を使ったノート3万冊と鉛筆21千本をネパールの子供たちにプレゼントするため発送した。毎日の作業から出る印刷残紙を集めてリサイクルノートを作った。鉛筆は北区に工場があるトンボ鉛筆が寄贈、予想外に高い梱包代はリサイクラー活動機構がフリーマーケット等の収益金を寄付して解決、輸送費は外務省が負担してくれた。
1994(H6).1.14	東京新聞	環境保護実践の場—北区に22日オープン—／エコ広場館—区民が自主運営～リサイクル市定期開催—／太陽光発電を利用	リサイクル活動を広めよう—。北区は、地球環境保護の実践をはかるため平成4年に「エコライフ宣言」をしたのをうけて田端5丁目に活動拠点となる富士見橋エコ広場館を開館する。区民でつくる北区リサイクラー活動機構(略称リラ)が自主運営する。地球環境の保全は生活の場での実践から—昨年行った「北区エコライフ宣言」のバックボーンだ。澤田和子リサイクル生活課長は「リサイクルを文化の水準まで高めたい」と話している。
1994(H6).1.15	北区ニュース	富士見橋エコ広場館オープン／1月22日・23日オープニング記念イベントを開催／エコライフ7つのステージ／「明日塾」塾生募集	「富士見橋エコ広場館」は、人と環境が調和した循環型社会をめざして、住民と企業と行政が互いに連携しながら進めるリサイクル活動拠点です。自然環境についての情報館として、風力発電やソーラー発電の実験を行い、雨水利用や汚泥ブロックを取り入れました。日常の暮らし方や地域活動を通じて、誰もが、何時でも、気軽に参加・交流しながら、リサイクルの輪を広げていきたいと思っております。お誘い合わせのうえ、お越しください。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1994(H6).1.25	都政新報	北区「富士見橋エコ館」完成／リサイクル活動拠点	北区が建設を進めていた「富士見橋エコ広場館」が完成し、21日に落成式が行われた。エコ広場館は「リサイクル文化」の創造をめざして、住民と企業と行政がお互いに連携しながら、日常の暮らし方や地域活動を通して誰もが何時でも気軽に参加・交流し行動を起こしていくリサイクル活動拠点であると同時に、自然環境についての情報館としての機能も備えている。
1994(H6).1.25	東京新聞	行ってみませんか出店しませんか—都内フリーマーケット案内—／行政もようやく本腰	各自治体でも、ごみの減量やリサイクル運動の一環として、フリーマーケットに注目しつつある。北区では「リサイクルを文化の域まで高めたい」と、今月22日にリサイクル活動の拠点として「エコ広場館」をオープンした。〈中略〉多くの自治体では、行政が市民のリサイクル運動の後を追う形になっているのも現状だ。
1994(H6).1.26	読売新聞	〈わが街“再生”②〉 出会い生んだリサイクルの縁／北区・田端エコ広場館／集まる人・人・人	北区田端5丁目にこの22日に開館したばかりの富士見橋エコ広場館。北区リサイクラー活動機構代表の竹腰里子さんは古くから当地で活動してきた住民。転出者が多く地域コミュニティが崩壊していくさまに心を痛めて……。行政側の代表であるリサイクル生活課長の澤田和子さんも危機意識は共通で「リサイクルと地域おこしのドッキング」で意見が一致。エコ広場館を舞台に「関心を持ってくれた人とどのように絆を作っていくか…勝負はこれから」と顔を見合わせた。
1994(H6).1.28	サンデータイムス	みんなの輪が創るリサイクルステージ！／北区・富士見橋エコ広場館開館／運営は区民リサイクル組織	北区民のリサイクル活動ステージ「富士見橋エコ広場館」が21日落成、オープンした。北区では区民レベルで様々なリサイクル活動が行われているが、同館は区民リサイクル活動の拠点となる。同館は区民のリサイクル組織「北区リサイクラー活動機構」(きたくRERA)に運営が委託された。落成式では、北本区長が道灌運営を委託する北区リサイクラー活動機構(竹腰里子代表)に鍵を手渡した。
1994(H6).1.28	朝日新聞	〈その先のごみ騒動・4〉 目標の達成へあの手この手／空き缶はどこで引き取ってもらえるの	北区田端五丁目の主婦竹腰里子さんは約20年間、地域の古紙回収のリーダー役を続けてきた。車が入れる道路まで運び出したり、スピーカで回収業者が来ていることを知らせたり。「引き取り業者探しも大変。それに値段が高いの安いのと出す人からも言われる」と…。〈中略〉北区は一昨年からの空き缶とビンの回収日を決めて、その日には、25世帯に一ヶ所の割合で3個のコンテナを置いた。
1994(H6).2.6	読売新聞／産経新聞／朝日新聞(2.7)	北区でリサイクルフォーラム／リサイクル活動の貢献団体など表彰—北区—／こちらは「再生事業」で	リサイクル活動感謝フォーラムがこのほど北区の北とぴあさくらホールで開かれ、牛乳パック回収などに取り組む稲田小学校など68団体、69個人が表彰された。表彰式のあと、埼玉県川口市でリサイクル活動に携わる消費生活アドバイザーの松田美也子さんが講演。「ドイツの学校では、ごみの持ち帰りや、ごみになった時に有害な文房具は使わないよう教育をしている」など外国の取り組み例を紹介した。
1994(H6).2.10	産経新聞	北区の「エコ広場館」ももて／リサイクル達人も登場／僅かの間に6000人	行政、住民、企業が一体となたりサイクルの拠点として1月21日オープンした北区田端の「エコ広場館」が好評で、来館者はすでに6千人を超した。単独のリサイクル施設としては日本で初めて、都内各自治体からも見学者が訪れている。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1994(H6).2.22	聖教新聞	広げよう！リサイクルの輪／東京・北区「富士見橋エコ広場館」／シンプルな生活文化つくる／“達人”による教室も好評	住宅街の一角に建つ「富士見橋エコ広場館」。ユニークな外観。自然のエネルギーを有効活用できる仕組みが設置されています。＜中略＞ とにかくここは、リサイクルのイロハからハウ・ツーまで、いろいろなものが詰まっている“リサイクルの館(やかた)”といってもよいほど。＜中略＞ そこには、区民の要望や声に的確に応えた行政の対応があり、そして、物を製造する側(企業)も回収された資源の買い取りや再生に協力していくといった、まさに住民・行政・企業がスクラムを組んで「リサイクル生活文化の創造」をめざす姿がありました。
1994(H6).2.25	北区商工通信 「新しい風」 No. 19	(誌名ロゴ脇のコラムに写真入りで記事掲載)	＜記事全文＞ さる月21日、田端五丁目に、単独施設としては23区初のリサイクル活動拠点「富士見橋エコ広場館」がオープンしました。風力や太陽光などの自然エネルギーを利用した施設で、住民と企業と行政の三者が連帯してリサイクル活動を進めます。リサイクルについての情報収集・提供、学習会、「リボン工房」「暮らしの博物館」などの事業のほか、毎週日曜日にフリーマーケットを行います。
1994(H6).3.20	あしたの日本を作る協会 「あした通信」 第85号	＜まちかどの写真館＞ 世の中に役に立たないものはないことを教える	資源を大切にし、環境にやさしい生活は楽しいよーそんな経験の出来るのが、東京・北区の富士見橋エコ広場館である。リサイクルについてPRのほか、牛乳パックでの再生紙づくり、さき布織り、カレットを使ったガラス細工などが体験でき、世の中に役に立たないものはないことを教えてくれる。太陽や風のエネルギーも取り入れた、運動に携わる人たちが運営にあたり、情報が交流する地域のたまり場でもある。
1994(H6).4.3	コミュニケーション・ペーパー 「山手倶楽部」 Vol. 7	＜中央環状線沿線情報＞ ー山手エリアのリサイクルセンター紹介ー / 北区・富士見橋エコ広場館	「リサイクル生活文化の創造」を目指し、住民が参加したり交流したりする場として今年一月に開館。情報提供や古布による裂き布織りなど手軽にできるリサイクルの実践やフリーマーケット、北区の暮らしの文化を展示した「暮らしの博物館」もあります。
1994(H6).4.30	朝日新聞	青空の下ゴミ拾い	「みどりの日」の29日、北区の市民団体などが集まって環境問題を考えようという「94エコロジーキャンペーン・北区」が区内3会場で開かれ、焼く3千人が参加した。同区を流れる石神井川沿いでは、一般募集で集まった区民ら約60人が、ごみを拾いながら歩く「クリーンキャンペーン」が実施され、空き缶一袋を含む五袋いっぱいのごみが集まった。＜中略＞ 残る2会場では、家で不用になった毛布や老眼鏡、使用済みテレカなどの回収や、フリーマーケットなどが行われた。
1994(H6).5.1	東京新聞	環境にやさしく	東京青年会議所北区委員会や明るい社会づくりの会などが石神井川流域でエコロジーキャンペーンをこのほど行った。同川では一般公募の参加者60人が空き缶拾いなどのクリーン作戦を展開。川沿いの滝野川公園ではチャリティー模擬店が出て使用済み切手やアルミ缶の回収、フリーマーケットも50店出店。富士見橋エコ広場館ではリフォーム体験やエコ製品の販売などを行い、遊びながらリサイクル意識を高めた。
1994(H6).5.12	東京新聞	＜フリマ通信＞ リサイクルセンター大流行	今、東京の各区は、競うようにリサイクルセンターの建設を進めている。平成4年度に江東区で完成したのを皮切りに、昨年は新宿、目黒、杉並で、今年1月には北区でそれぞれオープン。中でも“主流”は、北区の富士見橋エコ広場館のようなリサイクル活動基地型のセンター。北区のエコ広場館には、情報コーナーやホール、昭和初期の家庭のリサイクルを体験できる“暮らしの博物館”などがあり、区内の“リサイクル達人”がおもちゃや家電の修理も行う。運営は区民らがつくる「北区リサイクラー活動機構」による自主運営だ。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1994(H6).5.15	北区滝野川・馬場自治会 「ばんば新聞」 第66号	エコー広場館見学記(正村純子)	現在、様々な環境問題が叫ばれていますが、日常生活のなかで家庭にあふれるゴミを資源として見直そうと、区民のリサイクル活動の拠点として「エコー広場館」が田端駅の近く富士見橋のたもとに開設されました。まず目にとまったのはモダンな建物と風車でした。＜中略＞ 今、私達は好むと好まざるとに関わらず、あふれるほど多くの物に囲まれて暮らしています。このエコー館を訪問して、私達一人一人が自分の生活を見直し、次の世代に美しく健康な地球とくらしを残したいものと強く感じました。
1994(H6).7.8	サンデータイムス	企業の環境問題を考える／リサイクルビジネスを検証／エコ・エコシンポジウム	産業活性化と環境保全の両立を探る「エコ・エコシンポジウム」が、東京青年会議所北区委員会と北区担い手1000人会議の共催で2日午後3時から北区富士見橋エコー広場館で行われた。後援は北区経済課、北区リサイクル生活課。会場のエコー広場館は住民が自らの手で運営する都内初のリサイクルステージとして各方面から注目されている場所。パネラーには北区リサイクラー活動機構の竹腰里子氏、北区リサイクル生活課の谷本有美子氏など、コーディネーターはまちづくりコンサルタントの政所利子氏が務めた。
1994(H6).7.31	読売新聞／ 東京新聞(8.1)	＜すぽっと＞ “エイズとたたかう”講演／＜あすの催し＞ AIDSあなたにもっと知ってほしい／仲間たち展	アフリカでエイズ患者の看護を行っている助産婦、徳永瑞子さん(北区赤羽台)の講演が8月2日、北とびあ・つつじホールで行われる。同区が平和祈念週間の一環として主催する。「仲間たち展」は8月2日から6日まで(3日は休み)富士見橋エコー広場館で開催される。
1994(H6).8.14	日本経済新聞	＜けいざい今昔物語＞ リサイクルに江戸の知恵／ゴミの後始末、ノウハウ足りぬ東京／清掃行政、意識遅れる－再利用へ動く住民・企業／古着・古紙で問屋が活躍－江戸こそエコロジー	限られた資源を再生、再利用するリサイクル活動が盛んになってきた。ゴミ減量による最終処分場の延命策といった目先の問題から一歩進んで、広く地球環境の保全を視野に入れた活動へと質的にも変化している。自然との共生を都市生活に取り入れてリサイクルの仕組みを作った江戸の知恵は、現代の東京にどこまで生かされるのだろうか。＜中略＞ 北区は91年にリサイクル担当課を設置。区民から募集したリーダーを中核に資源ゴミの回収を徹底、「りさいくる達人」が不用品として出された家具などを再生する運動に取り組んでいる。
1994(H6).8.25	北区商工通信 「新しい風」 No. 21	＜エコ・エコ・シンポジウム＞ 地球環境を考えるとビジネスチャンスが見えてくる	去る7月2日、富士見橋エコー広場館で行われた「エコ・エコ・シンポジウム」は、エコロジーとエコノミーの両立を探ろうと、北区担い手1000人の会と東京青年会議所が共催したもの。環境問題は、経済、科学技術の発展へとつながるビジネスチャンスにもなります。＜中略＞ 中小企業にとっては、今、エコロジーを前向きにとらえることが、品質向上、生産性向上につながり、ビジネスチャンスを逃さない大きな条件になるかもしれません。
1994(H6).9.4	産経新聞／朝日新聞 (9.6)／東京新聞(9.7) ／都北新聞(9.9)	買い物かごの中から地球を考えよう／買い物通じて環境考／リサイクルショッピング／リサイクラーの買い物ガイド展／エコー広場館で13日まで	買い物から地球環境を考えようという「ショッピングガイド展」が富士見橋エコー広場館で開かれている。北区リサイクラー会議が、区内のスーパー28店がどのようにリサイクルに取り組んでいるか、などを調べてパネルや実物で展示している。また、リサイクル先進国のドイツのスーパーとの比較を調査した展示も注目されている。
1994(H6).9.9	都北新聞	第4次リサイクラー会議－16人に依嘱状交付／活動内容に二本の柱	第4次北区リサイクラー会議が発足した。9月7日、北とびあで委嘱状交付式が行われ、北本区長から委嘱状が手渡された。座長に斎藤正美氏を選出、活動内容の検討を行った。



掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1994(H6).10.9	北区新聞	鹿谷副知事が視察－北区のリサイクル事業を評価	東京都の鹿谷副知事は、10月4日、都内23区の中でも特に大きな実績をあげている北区のリサイクル事業を視察した。一行は、まず田端の富士見橋エコ広場館を視察し、リサイクル活動機構の竹腰里子代表からビンや缶などのリサイクルシステムについて説明を聞き、ついで滝野川東出張所管内のビン・缶ステーション回収事業について小林飛鳥山自治会長の説明を受けた。
1994(H6).10.15	都北新聞	<街角かわら版> 鹿谷副知事が広場館を視察／天然ガス自動車－環境保全に活用	鹿谷崇義副知事一行が、10月4日、田端の富士見橋エコ広場館と中央公園の緑のリサイクルなど、北区のリサイクル事業を視察した。<中略> 北区は今月から圧縮天然ガス自動車1台を公用車として導入した。……天然ガス自動車は主に環境保全事業やリサイクル関連事業に活用され、リサイクル事業としては、富士見橋エコ広場館を中心として、地域リサイクラーや町会・自治会の役員との連絡、ビン・缶回収ボックスの運送などで使用していく。
1994(H6).10.・ 1994年10月号	月刊廃棄物 1994年10月号	《東京都北区で―》空き缶回収の受け皿を提供／回収処理車「サンクル号」を運行／リサイクル・ステルナー・ジャパン協同組合	缶・ビン・古紙など有価物再生の共通窓口として昨春発足した「リサイクル・ステルナー・ジャパン協同組合(事務局:東京都北区/理事長:菊池隆重氏)」は、北区からの委託を受けて、空き缶回収処理車「サンクル号」の運行を行っている。回収先は、区に登録のあるアルミ缶回収団体、学校や町会館、団地などの集積場所で、区が主催するイベントの会場でのデモンストレーションにも出向いている。
1994(H6).12.5	東京新聞／ 産経新聞(12.8)／ 都政新報(12.9)	リサイクル拠点区内全域に完備／北区の「区民参加」缶・ビン回収－区全域で拡大スタート／「ステーション回収事業」区内全域をカバー	北区の「ステーション回収事業」は最後に残った田端地区が7日からスタートし、これで区内全域が網羅された。都がモデル事業として行っている所は別として、区単独で実施される資源回収事業を区内すべてに広げたのは北区が初めてとなる。25世帯を一単位として回収拠点を設け折り畳み式コンテナで週一回回収する方式。各町会・自治会から一人ずつ「地域リサイクラー」を任命。この人たちが中心となってコンテナの設置・管理などを行っている。その数4千人近くで、区民主体のリサイクルになっているのが大きな特徴。
1994(H6).12.10	朝日新聞	ビン・缶回収ステーション区内全域をカバー／今後は他資源再生にも活用／住民が自主的管理－不燃ゴミは大幅減	北区が1992年から進めてきたステーション方式のよるビン・缶の回収網がこのほど完成し、区内全域をカバーすることになった。同区では「せっかく完成したこのシステムを、今後は、ペットボトルなど他の資源のリサイクルにも活用していきたい」と話している。このシステム稼働による効果は、92年度に344トンだった回収量が、93年度には1523トン、今年度は10月までの半年間で1903トンを上回る実績をあげた。逆に、不燃ごみの量は92年4月に3245トンだったのが今年10月には2372トンへと3割近く的大幅減少となった。
1994(H6).12.14	毎日新聞	2年半…住民のリサイクル意識も根付いた／「北区方式」19番目の回収エリア／「不燃ごみ」3割減る	空き瓶や空き缶の分別回収に、独自の「ステーション回収方式」を実施している北区で、このほど19番目の回収エリアが発足、区内全域を網羅した回収体制が特別区で初めて完成した。1992年4月にスタートして2年半余。開始前と比べて不燃ごみの回収量が3割近く減ったといい、区民のリサイクル意識も着実に根付いているようだ。区リサイクル生活課の澤田和子課長は「リサイクルを進めるには、街の組織作りというか、人のネットワーク作りが大切。地域主導で進めたのが成果につながっていると思います」と話す。
1994(H6).12.19	産経新聞	<マンデースポット> 北区のステーション回収／見え始めた住民自治の片鱗／主体的かかわりで高まる意識－不燃ごみが激減	空き缶やビンを回収する北区の「ステーション回収」が今月から、久野事業としては23区で初めて、区内全域に拡大された。区民が主体的にかかわることでゴミへの意識が高まり、不燃ごみが予想以上に激減するなど思わぬ成果も。缶やビンなどのリサイクルは平成3年10月に10月に東京二十三区長会が行った宣言を受け、各区が全域実施に向けて取り組んでいるが、その延長線上には清掃事業の区への移管を目玉とする特別区制度改革がある。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1995(H7).1.21	東京新聞／ 読売新聞(1.27)	きょうから一周年記念イベントー北区の「エコー広場館」／リサイクル講演とパッチワーク教室ーきょう北区で	リサイクル活動の拠点として「富士見橋エコー広場館」を昨年1月にオープンさせた北区は、21日から27日まで開館一周年記念イベント「エコエコステージ'95」を行う。
1995(H7).2.20	東京新聞／読売新聞	感謝フォーラム／「リサイクルに貢献」で表彰	北区がリサイクル活動に貢献した団体や個人を表彰する「リサイクル活動感謝フォーラム」が、19日、北とびあ・さくらホールで開かれ、142の団体と個人が表彰された。また、「牛乳パックリサイクル活動ネットワーク」と「北区リサイクラー活動機構」の代表から、それぞれ、20万円と30万円が阪神大震災の義援金として北本区長に手渡された。
1995(H7).3.11	読売新聞	富士見橋エコー広場館／リサイクル精神こだまする／環境への配慮、随所に／“達人”が修理もします	北区が区民のリサイクル活動の拠点にしようとした環境学習施設の第一号館。昨年1月のオープンで、リサイクル精神がエコー(こだま)のように広がって返ってきてくれればと命名された。計画段階から住民の意見を取り入れ、管理・運営は住民の自治組織「北区リサイクラー活動機構」(竹腰里子代表)に任されている。施設自体が徹底して環境への配慮を巡らせたものであるのは勿論、「暮らしの博物館」や「リボン工房」での取り組みや「サンクルホール」での講演会・勉強会などリサイクルを切り口にした多彩な試みが展開されている。
1995(H7).3.26	産経新聞	リサイクルで消費者調査<厚生省>／缶、びんなどの処理費用ー製造者、販売店が負担を	6割近い人が、管やビンなどのゴミの処理費用は製造者、販売者が負担した方がいいと考えており、そのうち約8割の人は、その処理費用を製品価格に転嫁すべきではないと思っていることが25日、厚生省の「平成6年保健福祉動向調査の概況」で分かった。ゴミ問題をめぐっては、全ての包装や容器のゴミについて、製造者や販売者にリサイクルを義務付ける「容器包装廃棄物リサイクル法案」(仮称)そ厚生省と通産省などが今国会に提出する予定で、最終的なコスト負担を業者、消費者のどちらが引き受けるかが焦点になっている。
1995(H7).3.・	練馬区立消費生活センター 「消費者だより」 第108号	リサイクルがあぶない／生き生きらしの達人／北区のエコー広場館に行ってきました	再生資源の回収率が高まるにつれてリサイクルの流れは滞り、危機に直面しています。静脈産業と言われる回収・再生の経済システムの立ち遅れが原因ともいわれ、一刻も早い本格的なリサイクルを定着させる企業、行政の対応を望みます。<中略> そんななか、北区のエコー広場館に行ってきました。リサイクル活動を進め、シンプルな生活文化を創り出す情報の発信基地として昨年1月に開館したエコー広場館。<中略> 縁側で日向ぼっこをしながら、“らしの達人”たちと交わす会話に、里帰りをした時のように心の底まで暖かくなりました。
1995(H7).5.11	朝日新聞	<町の達人> ボランティアで電気製品などを修理するー大澤宏庸さん	北区田端に昨年開館したリサイクル普及のための施設「富士見橋エコー広場館」には、廃材活用や和服のリフォームなど、“らしの達人”が何人もいる。同区西ヶ原の大澤宏庸さんは、電気製品などの修理が専門だ。<中略> 費用は実費で、修理代は無料。ただし、アジア・アフリカヘノートなどを贈る「明日(アース)基金」への100円、200円の協力を頼んでいる。
1995(H7).8.8	産経新聞	リサイクルの達人に／北区富士見橋エコー広場館／講習通じ考える場	昨年1月にオープンし北区民のリサイクル活動の拠点として定着した「富士見橋エコー広場館」は夏休みに入り家族連れや子供同士のグループなどが数多く訪れている。「使い捨てではなく修理して使うことを子供のうちから学んでほしい。だれもがリサイクルの主役になれるよう、おもしろい企画を考えています」と同館の竹腰里子代表。佐賀県から上京して訪れた親子連れー父親は「ごみ処分場などのスペースには困らない田舎の方がごみ問題には無関心。東京に学ぶべきところが多いと思った」と話す。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1995(H7).9.19	産経新聞	給食の残飯、たい肥にして農家へ供給／北区と群馬県甘楽町／帰りに野菜購入、給食に	ごみ減量化を目指し、学校から排出される残飯を生ごみ処理機でたい肥に変えている北区は18日までに、たい肥を姉妹都市の群馬県甘楽町の農家に提供し、逆に同町の農作物を購入して学校給食に使う方針を固めた。都市と農村の姉妹都市提携をリサイクルに生かす取り組みは、全国的な注目を集めそうだ。
1996(H8).1.28	東京新聞	<東京ライブ> 給食の生ごみをリサイクル／北区で来月スタート／『滝野川ニンジン』『滝野川ゴボウ』復活模索の中でアイデア生まれる	給食余の生ごみ処理機でできる有機肥料を生かせないか―。北区で小中学校の有機肥料を農家に無料提供し、給食用の無農薬野菜を作ってもらおうという、ユニークなりサイクル活動が2月からスタートする。同区滝野川にあった江戸野菜「滝野川ゴボウ」「滝野川ニンジン」を復活できないかと模索する中で生まれたアイデア。関係者は「これぞ、循環型社会への第一歩」と意気込んでいる。
1996(H8).1.28	サンデータイムス	96クリーン東京フェスタinKITA／清掃局と地元リサイクル団体／ゴミ、リサイクルに関心を	東京都清掃局、北区リサイクラー活動機構、北区、滝野川清掃協力会、王子清掃協力会では、21日、富士見橋エコー広場館と滝野川会館の二会場で「96クリーン東京フェスティバルinKITA」を開催した。第一会場の富士見橋エコー広場館で行われた「ごみの中からこんなもの展」では、サイドボードやソファ、テーブルといったものが無料でもらえるとあって多くの人々が集まった。
1996(H8).2.2	産経新聞	「給食のリサイクル」たい肥第一便が出発／北区から群馬・甘楽町へ	学校給食から排出される生ごみの減量を目的に、北区は生ごみを処理した後に出来る堆肥を群馬県甘楽町に送り、有機農業の肥料として使ってもらおうことを決めたが、2日、同区で2番目のリサイクル広場「北ノ台エコー広場館」の開所に合わせ、たい肥を積んだ車の発車式が行われた。
1996(H8).2.2	産経新聞	島根県の饅絵展示―北区のエコー広場	島根県大田市の市民が1日、昨年3月に廃校になった北区十条の旧北ノ台小学校を訪れ、同市内の蔵に施されていた「饅絵(こてえ)」を展示した。同小の校舎を利用して北区が2日にオープンさせるリサイクル広場「北ノ台エコー広場館」の趣旨に賛同し、同市など石州地方に伝わる「石州左官」の職人技術について知ってもらおうと上京した。
1996(H8).3.7	東京リビング	公共のリサイクル施設を使って生活上手に／引越シーズンを前に不用品をゴミにしない方法／地域リサイクルセンターでは家具、家電製品が無料で／不用品交換情報のやり取りも活発	春は引越しのシーズン。不用になったものをリサイクルのルートに乗せたり、欲しいものをリサイクル品の中から見つけたりしませんか？都や区もリサイクルには力を入れていますから、ぜひ活用してみたいものです。<中略> 不用品を展示するための専用施設があるのは11区。<中略> 北区の富士見橋エコー広場館では、毎月第一日曜日「大型資源活用市」を、また毎月第二日曜日には「衣類・日用雑貨我楽多市」を開催している。
1996(H8).3.22	全国農業新聞	堆肥のお礼は野菜／東京・北区→群馬・甘楽町有機農業研／お見事リサイクル／幻の野菜復活も計画	群馬県甘楽町有機農業研究会が2～3日、東京・北区のエコー広場で有機野菜直売会を開いた。この催しはふおう研究会が、同区内の小・中学校で給食ごみを発酵処理したたい肥を提供してもらい、栽培した有機野菜を学校給食用に供給する「野菜リサイクル」の一環。学校からの数トンの堆肥を同研究会のトラックに乗せる“初荷”も同時に行った。また、同研究会は、東京・北区の「幻の野菜(滝野川ニンジンと滝野川ゴボウ)」の復活にも着手している。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1996(H8).3.24	赤旗	わが家の“リサイクル作戦”／引っ越しの荷物減らしたい…／捨てればみんなゴミだけど…／リサイクルなら何でもありー東京・北区エコー広場館	リサイクルの拠点としてユニークな活動をしているのが、東京・北区のエコー広場館。1994年に同区が2億円以上かけて建設しました。廃油利用の石けん、古布を利用した裂き織りなどリサイクル手芸、フリーマーケット、使える粗大ゴミの販売、アクセサリー、カメラ、電気製品などの修理、環境問題の講演会…。およそリサイクルに関係のある活動なら何でもあり。同館を運営する人も、技術を提供する人もすべてボランティアです。
1996(H8).3.31	産経新聞	北区・地域住民のリサイクル活動拠点「百匠校房」／匠人から学ぶ「モノを大事にする心」／牛乳パックが色鮮やかな「和紙」に／さいばし使って「南京玉すだれ」／廃材や半端材で「クラフト」製作	南京玉すだれを作る人、クラフト(工芸品)を製作する人、牛乳パックから色鮮やかな和紙をつむぎ出す人…。北区上十条の旧・北ノ台小学校の校舎にこのほどオープンした「百匠校房」は、現代の伝統技術者“匠人(たくみびと)”の城だ。正式名称は北ノ台エコー広場。地域住民のリサイクル活動拠点となる北区の施設だ。本来はゴミのリサイクル活動の場だが、現代生活で忘れ去られようとしている伝統技術にも光を当てているのが特徴。
1996(H8).4.1	毎日新聞	<夢を追う> リサイクルにかける	「リサイクル運動は一種の生活ルネサンスですよ」ー北区にあるリサイクル運動の拠点富士見橋エコー広場館の代表、竹腰里子さんは約25年にわたる県境問題への取り組みを振り返る。竹腰さんがリサイクル運動に携わったのは地元のごみ問題などを解決するため主婦らで作った「生活学校」への参加がきっかけ。古新聞、段ボールなどの回収に回りながら、まだ使えるものが惜しげもなく捨てられている状態に「本当の豊かさって何だろう?」と自問自答することも。「環境悪化は私たち一人一人の責任。微々たる取り組みの積み重ねで変えていこう」と語る。
1996(H8).4.9	毎日新聞	<投稿欄::みんなの広場> エコー広場館は有意義な活動(パート勤務・井上裕子 35 福岡市南区)	「環境ー地域から地球へ」のページに、行政が後押しして住民が運営、地域のリサイクル拠点となる施設「エコー広場館」が紹介されていた。大変有意義な活動だと思う。ー中略ーさらにこの運動に障害者の参加も求めていけば、将来は雇用を提供する可能性も秘めていると思う。ー中略ー リサイクル施設を通して健常者との生活の交流の機会も増える。これもエコー広場館の代表者が言われた「生活ルネサンス」と言えるのではないか。「(「北区富士見橋」が入っているとよかったですね)」のコメントを添えて五味様よりいただいたFAXで収集)
1996(H8).4.14	産経新聞	滝野川ニンジンを探して／洋食の普及で消えた! ?／北区のグループが復活めざす	畑のない都会で“幻のニンジン”を探しているグループがある。北区滝野川を中心にボランティア活動を行っている「車イスをおくる会」。かつて同地で盛んに栽培されていた滝野川ニンジンと滝野川ゴボウの復活を目指して種を探して色ののだが…。 <中略> 滝野川ニンジンの歴史は江戸時代にさかのぼる。江戸の近郊農村として早くから栄えた滝野川地区では、江戸中期ごろからゴボウとともに特産品となり、中山道沿いに発展した種子販売業者によって全国に広められ、大正時代までの日本の主要品種になった。
1996(H8).5.1	環境新聞	<ルポ人の輪発見> リサイクルでまちづくりを	散歩の途中に、学校帰りに、何となくたちよって、つい話し込んでしまうー。そんなリサイクル施設が東京都北区田端にある。リサイクル活動実践の場が、どのようにして住民のコミュニケーションの拠点になっているのか。エコー広場館をのぞいてみた。「にぎやかな館内」「リサイクラーが活躍」「できることを楽しむ」「散歩途中の休憩所」…とにかくここには、大人も子供も大勢集まってくる。官民一体の努力や活動内容の魅力…でも何よりもリサイクラーたちの、周りを明るくしてしまう元気が人を引き寄せているようだ。
1996(H8).7.29	経営新聞	<flash> 生活学校運動を創始ー竹腰里子さん／リサイクルの実践者	東京都北区にあるリサイクルを中心とした「富士見橋エコー広場館」は建物は北区、管理運営などは民間で行っている全国でも珍しいシステムをとっている。そこを事務局にネットワークを広げている北区リサイクラー活動機構「きたくRERA」の竹腰里子代表は「わたしは、昭和47年から生活学校運動(地域の主婦が集まって公害や食品、リサイクル問題について話し合う)を行っているんです。 <中略> リサイクルがもっとメジャーになって、日常化し、生活の一部になることを願っている」と話す。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1996(H8).8.6	読売新聞	生ごみリサイクル最前線／堆肥化し土に還元－市民グループが自主的に回収	暑い夏、とりわけ気になる生ごみ。通常なら「可燃物」として回収され処理場の焼却炉に投げ込まれ、灰になって埋め立てられる。だが、堆肥化して土に返せば、ごみを減らし土を豊かにでき、パンク寸前の最終処分場にとってもありがたい。「生ごみ」に知恵を絞る各地の取り組みを追った。〈中略〉東京・北区の市民グループ「北区リサイクラー活動機構」もそんな一つだ。学校就職の残渣で堆肥を作り、姉妹交流している群馬県甘楽町の農家に提供。育った有機野菜を買うというシステムを、今年3月からスタートさせた。
1996(H8).8.7	毎日新聞／東京新聞／読売新聞	祈平和－広島原爆忌に／北とぴあでイベント／平和祈念行事スタート／北区の平和祈念週間始まる	北区の北とぴあと富士見橋エコー広場館で6日、平和祈念イベントが始まった。この日、北とぴあ正面の平和祈念像前で行われたオープニングセレモニーでは私立聖学院中学・高校の吹奏楽部と、富士見幼稚園の鼓笛隊が演奏を披露。富士見橋エコー広場館では、リサイクル活動を紹介する展示が行われている。10日まで。
1996(H8).8.14	日本経済新聞	夏休み捨てずに工作リサイクル／各地で子供向け教室／楽しみながら環境を考える	夏休みを利用して子供たちに楽しみながら環境問題を考えてもらおうと、リサイクルを兼ねた手作り教室が各地で開かれている。東京都北区にある富士見橋エコー広場館では、夏休みこども広場と名付けた企画を9回開催。廃油を原料にした石鹸作りや牛乳パックを使った椅子作りの講座などですべて無料。同館を運営している北区リサイクラー活動機構の竹腰代表は「小さい時から環境のことを知ってもらいたい。ここは広場だから、誰もが何時でも参加できるようにしている」と話している。
1996(H8).10.3	板橋エコロジー講座有志グループ「ぼんぷ」第4回ポンプのご報告	北区富士見橋エコー広場館絵行こう！／運営を住民全体でやっているのがエコポリスセンターとの大きな違い／	〈9月12日に同グループの呼びかけで行った施設見学の報告。参加者は10名〉「施設全体は決して大きくないのに、あっちにもこっちにもいろんな人々がいっぱいいて、色々なことをしていて色々な物がイッパイあって、隅から隅までいろいろに使われている…！」〈中略〉北区リサイクラー活動機構の竹腰里子さんが説明してくださいました。……〈北区のやり方〉行政は舞台作り(場所と金)、舞台上で演ずるのは住民→「信頼と協力」、ビン、カン回収を進めるための行政との話し合いの中で地域リサイクラーを育てる働きを続けた……
1996(H8).11.30	掲載紙名不詳	全公立小中学校に生ゴミ処理機導入／北区・23区で初	区内の小中学校に生ゴミ処理機導入を進めてきた北区は29日、最後に残った三つの小学校に処理機を設置し、区内64の公立小中学校全校への設置を完了した。23区内で全校に設置したのは北区は初めて。区はモデル校に処理機を設置してところ「ゴミの量が大幅に削減された」との報告があり、平成6年度からバイオの高速発酵型生ゴミ処理機を導入していた。
1996(H8).12.10	羽村市ボランティア連絡協議会 はむらボランティアつうしん 第39号	北区・富士見橋エコー広場館を訪ねて	〈同協議会主催の施設見学記〉「まあ、きれい！」「かわいい！」と一同歓声をあげるほど素敵な建物。テレビでの紹介や見学者も多いそうで、竹腰館長のお話は整理されていたとでも分かりやすいお話でした。活動も円滑に行われているからだと思います。太陽熱利用、雨水・風力の利用も考えて設計された建物で、ここを拠点に住民全体のリサイクルがきめ細かく行われているそうです。
1996(H8).12.10	読売新聞	処理・回収も着々と成果－再生率65.7%初めて米を上回る／メーカー、行政、住民三者の努力が結実－「運動の輪」拡大の兆しも／市町村の悩み解消「出張式設備」登場－低コストで選別・圧縮	容器包装リサイクル法の本格施行を前に悩んでいる市町村がある。人口が少なく、これまでさほどリサイクルと取り組んでいなかった所だ。新たに多額の設備人件費がかかるからだ。そんな悩みの解消を狙った移動型の設備が登場した。コンテナに選別・圧縮などの必要な道具一式を詰め込み、どこへでも出張する。開発したのは、東京都北区に本社がある空き缶・瓶再生業の菊池商店。社長の菊池隆重さんは「高額な処理施設は市民の負担を増すだけ」と話す。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1997(H9).1.10	日刊産業新聞	安らぐ非過剰の世界／昭和20年代の無駄のない暮らしーリサイクル企業が模型で再現／細部に遊び心とこだわり／今月末から東京北区内で展示／廃材を利用した工夫も	ここ最近、高度成長期以前、昭和20年代後半から30年代にかけての町並みを再現したテーマパークが多くの人を集めている。＜中略＞ 東京・北区のリサイクル業、菊池隆重さんは昨夏から、仲間たちと昭和20年代の住居を7・5分の1に縮小した模型制作に没頭してきた。＜中略＞ 菊池さんの地元北区では、平成4年に「北区エコライフ宣言」をまとめ、生活現場からのシステム作りと人材育成に力を注いできた。
1997(H9).1.10	読売新聞	復活＜北区名産＞滝野川ゴボウ／参勤交代の全国大名お気に入り／区民有志ら、きょう販売	北区の住民グループ「車イスを贈る会」が、姿を消した地元名産の「滝野川ゴボウ」の復活栽培に成功し、きょう19日、滝野川西エコー広場館で開かれる資源活用市で販売される。＜中略＞ 地元では滝野川ゴボウとともに滝野川ニンジンも名産品だったが、都市化で区内の畑が減ったことや運びやすい短い品種が好まれるようになり、いずれも区内から姿を消したものの。復活にあたっては、同区と交流のある群馬県甘楽町の有機農業研究会に栽培を依頼した。
1997(H9).3.18	田端中学校PTA会報「田端だより」第90号	エコー広場館体験記	北区の富士見橋エコー広場館は、今年3年目を迎え、リサイクル生活文化をつくり出していくため、誰もが何時でも気軽に参加できる多様な活動がくり広げられています。—中略— 私も2月17日「におい袋作り」を体験してきました。—中略— 私たちは今、使い捨てがあたりまえになり物を大切にするという基本的な心が欠けてきたように思われます。小さな端切れでも可愛い匂い袋が作れて、汚れた油でも石鹸ができます。自分の身の回りだけでもずいぶん無駄にしているものが多いことに気が付きました。みなさんもエコー広場館でステキな発見を…。
1997(H9).4.20	東京新聞	＜東京ライブ＞ 住民主導のリサイクル定着／食器棚やテーブル、田化成品…自主的に持ち寄りフリーマーケット／小中学校で出た生ごみ堆肥化～群馬・甘楽町に搬送～有機野菜栽培に活用	今月から容器包装リサイクル法が施行される時期、3年目に入った富士見橋エコー広場館を訪ねた。＜中略＞ 同区は3月までに生ごみ処理機を区内64の小中学校に設置し終えた。堆肥化した生ごみを群馬県甘楽町に送り有機野菜を作って区に運んで区民が買うシステムだ。＜中略＞ これらの運営は北区リサイクラー活動機構に属する約百人のボランティアたちが行っている。昨年10月からは機構内に学生や留学生も交えたシンクタンク「リサイクル新聞組(しんせんぐみ)」を設け、新しい試みなどを考えている。
1997(H9).5.17	毎日新聞	循環型社会実現のモデル／活発化した生ごみリサイクル	生ごみを「ゴミ」として捨てずに、コンポスト(堆肥)としてリサイクルする動きが企業や学校、家庭で盛んになってきた。東京都北区は学校から出るごみの減量化対策として、93年から小中学校に生ごみ処理機の導入を進め、昨年11月、全64校での設置を完了した。給食の残りをコンポスト化し、校内の花壇や果樹園に使う。一部は群馬県甘楽町の有機栽培農家に送っている。
1997(H9).6.19	東京中日スポーツ	＜おもしろ体験スポット＞ リラ石けん工房／身をもってリサイクル学ぶ／使い古しの食用油でせっけんづくり	使い古しの食用油を使って石けんを作るという話は聞いたことはあったが、いったいどうやって作るのか？毎週火曜日に石けん作りを行っている北区の富士見橋エコー広場館へやってきた。作るのは屋外。貸してもらった水色のかっぽう着のひもをしめ、作り方を教えてもらう。＜中略＞ 1週間から10日でプラスチックの型を外す。カゴなどに入れて風通しのいい場所に置けば、約3週間で出来上がり。天日干しをすればするほど表面が白くなるそう。身をもってリサイクルを体験したい人はぜひ！
1997(H9).7.・	誌名不明	＜爆笑問題の何だってリサイクル 第4回＞ 今月の課題:古い布／北区のエコー広場館におじゃましました／古い布を生き返らせるのは人間の歴史のリサイクル ※二人のサイン色紙有り	1997年7月1日、人気の漫才コンビ「爆笑問題」の二人、太田光と田中裕二が富士見橋エコー広場館を訪ねた。絶対使わないとわかっているのに長年タンスの肥やしになっている古着。「もう捨てちゃえ」という前に、ぜひ「富士見橋エコー広場館」へ。いらぬ和服やシャツ、なんでも可愛いぬいぐるみや小物にリサイクル。その技はまさに達人！！二人に果たして出来るのか…？細く裂いた古布を新しい布に織り変える「ハタ織り」に没頭する田中は「あのボロ切れが…」と思わず涙。余り布で作ったお手玉を器用に操る太田…

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1997(H9).10.15	消費生活新報	地域のリサイクル活動の拠点—北区エコー広場—	ゴミ問題が深刻な課題となっている今日。いかに環境に負担をかけない暮らしを実現していくかが問われている。東京都北区では行政と住民の連携により、ユニークなリサイクルへの取り組みが行われている。〈中略〉地球環境を考え、過剰な消費を見直すことは喫緊の課題だが、それはまた、使い捨ての便利さを手放し自分自身の手を使う煩わしさを引き受けることでもある。煩わしさを引き受けつつ、知恵を出し合い、楽しみながら実践しているこの取り組みがどのように発展していくか見守りたい。
1997(H9).10.18	読売新聞	〈まちかど人名録〉区民リサイクルの先頭に立つ竹腰里子さん(北区田端)／住民の自己実現の場にも	3年半前に開設した富士見橋エコー広場館は今はやりのリサイクル施設だが、他の施設とはちょっと違う。全国の自治体などから視察や見学が年間百五十件くらいあるのだという。ここを切り盛りしている住民ボランティアについて北区リサイクラー活動機構の竹腰代表は「これをやって下さいではなく、やりたい活動をしてもらう。老若男女が知恵を出し合う。ここは自己実現の場でもあるんです」という。「ここで交流すると、みんな生き生きしてくる。人間のリサイクルの場でもあるんですよ」とも。
1997(H9).11.9	朝日新聞	〈社説〉地球人の世紀／静脈の流れ止めないで／とどこおる回収路	東京の北端、足立区にある大手の瓶回収業「戸部商事」が手がける仕事は、この数年で大きく変わった。創業百年余の同社は、集めた一升瓶などを洗ってメーカーにおさめてきた。瓶の作業場は今も動いているが、その隣には缶の仕分け場がつくられ、ペットボトルの処理工場も動き出している。昔ながらの商売では先細りのためだ。「瓶の物流業が廃棄物の総合サービス業になった」という。商品を使った後の廃棄物を処理し資源として再生させる「静脈産業」が機能不全に陥りつつある……
1998(H10).1.24	東京新聞	『エコエコステージ'98』始まる／北区のリサイクル拠点エコー広場館—開館4周年記念イベントで	富士見橋エコー広場館で23日、開館4周年記念イベント「エコエコステージ'98」が始まった。同館は区の施設でありながら完全に住民主導型で運営されるユニークな施設。「北区のノウハウに学べ！」と、10区からリサイクル課の職員や住民ら約30人が集まり情報交換も行われた。同館は平成6年1月、本格的なリサイクル拠点として他区に先駆けてオープン。運営は北区リサイクラー活動機構に属している約百人のボランティアたちが行っている。今回のイベントは、日ごろの活動やリサイクルの楽しさを知ってもらおうのが狙い……
1998(H10).6.20	産経新聞	〈ごみは甦る 72〉 布で遊ぶ／愛用の服がぬいぐるみや袋に	布は紙や空き缶と違い、衣服から衣服、衣服から袋など、愛用品の面影を生かしたまま容易に作り替えができる。東京都北区の富士見橋エコー広場館では、民間ボランティアが連日ユニークな布のリサイクル教室を開いている。講師の久光勝子さんは「布が貴重だった祖母の時代には当たり前に行ったこと」と話すが、独特な風合い物があふれる現在でも十分に魅力的。自分自身の歴史、思い出もいっしょに織り込んだオリジナルが作れるのも人気の秘密なのだろう。ここは、物の大切さと伝承技術を知るよい教育の場でもあると久光さんは強調する。
1998(H10).7.10	東京新聞	〈東京・遊学スポット〉 リサイクル通して広がる“人の輪”—富士見橋エコー広場館—	住民主導のリサイクル施設として平成6年1月にオープンした北区の富士見橋エコー広場館。住民たちがボランティアで管理運営する全国初の施設だ。60人ほどのボランティアが毎日12人ずつ交代で運営し、1日平均80人も人が利用するという。リサイクルを通してエコー(こだま)のように人の輪を広げたいという思いが込められた広場という。〈中略〉「暮らしの博物館」には昭和30年頃の家庭の台所を再現した懐かしいコーナーがあり、希望者にはボランティアの藤沢秀子さんが当時の暮らしぶりなどを説明してくれる。
1998(H10).7.25	産経新聞	〈生活欄〉 手軽に楽しく衣服をリフォーム／古ネクタイで作るベスト／テディベアを作ろう！(型紙と作り方の解説あり)	連載「ごみは甦る」の72回目〈布で遊ぶ〉の中で衣服のリフォームについて紹介したところ、問い合わせの手紙がたくさん寄せられた。なかでも「ネクタイで作るベスト」や「テディベア」は人気もの。簡単な作り方を聞いた。東京都北区の水谷裕子さんは、富士見橋エコー広場館などで自分で考案した古ネクタイなどを利用したリフォームベストの講座を開いている。また同館では余り布や衣服から作るテディベアの講座も人気を集めている。久光勝子さんによると、テディベアはウールのコート、スカートなどを使うとしっかりしたものができるという。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1998(H10).8.・・	住都公団広報紙 YOURらうんじ 第112号	<ボランティア入門身にガイド—9> 生き生きボラン ティア／ボランティア現場レポート～富士見橋エ コ—広場館	「ここは自己実現の場です」と、住民のためのリサイクル活動拠点「富士見橋エコ—広場館」の運 営を任されている民間ボランティアの代表者・竹腰里子さん。エコ—広場館では、ゴミの減量や 再利用などを通して地球環境を守るという実践活動とともに、さまざまな人たちとふれ合い、交 流することを通してコミュニティを創造している。裂き布織りや牛乳パックで椅子作りといった講 座、柱時計から傘、まな板削りなど修理修繕を行う「リサイクル達人」、大型資源活用市やフリー マーケットなど活動は多彩だ。
1998(H10).8.31	朝日新聞	<温暖化防止—なぜ減らないCO2 7> 経済シ ステムに環境の視点必要／変革の兆し個人の行 動から	地球温暖化は企業の経済活動や個人の生活に深く広く関わっている問題だ。経済システムに 環境の視点を取り込む工夫が必要であり、企業や私たち一人ひとりがCO2を減らす主人公だ。 <中略> 店のリサイクルへの取り組みや商品の環境情報を集めた「買い物ガイド」をつくるグ リーンコンシューマー運動も広がっている。自分自身が環境に与えている影響を知ること必要。 一人では何もできない、やっても仕方ないではなく自分が主人公の生活だからこそやれるこ とがある。(富士見橋エコ—広場館での古着でわらじ作りの写真が掲載)
1999(H11).1.26	読売新聞	<都民版地域ニュース“すぽっと”> 不用品の再 生方法PR	家庭で出た不用品の再生や廃材の有効利用などをPRする「エコエコステージ'99」がこのほ ど、北区田端5の富士見橋エコ—広場館で開かれた。同区の主婦や学生ら約130人で作るボラ ンティア団体「北区リサイクラー活動機構」がリサイクル意識を高めてもらおうと企画した。人気 は壊れて使えない日用品を修理する「リサイクル達人集合！」のコーナーで、半信半疑で統計 や傘などを持ってきた家族連れらは直して使えるようになったお気に入りの品を手満足げだっ た。
1999(H11).・・・・・	環境新聞	<環境まちづくりへの道・6> 模索される市民参 加／市民組織が運営管理—積極的に人づくり推 進—北区エコ—広場館	ここは全国でも珍しく市民主体のリサイクル活動を中心として環境まちづくりを行っている。富士 見橋エコ—広場館は市民参加のモデル的な施設として、開館して5年を経過した今も見学者が 後を絶たない。取材に訪れた時も関西の自治体担当者が見学に来ていた。市民団体をどのよう に育てたいのか、その手掛かりを得るために来館したという。自治体としても市民参加は大き なテーマになっているようだ。
1999(H11).3.5	都政新報	<文化／声／生活> 高校生を北区のパート ナーに／北区高校生モニター・イメージ戦略高校 生協力員	行政と高校生との関わりは具体的にどのようなものが思い浮かぶだろうか。おそらくすぐにはイ メージできない。北区では、区政といわば最も遠い存在だった高校生をパートナーとして活用す る全国的にもユニークな活動を今年度から新たにスタートした。高校生が集積している地域特性 と高校生独特の感性や能力を生かし①区政に関するモニターとして、②北区のイメージアップ戦 略高校生協力員として、区内に通う高校生の参加を得ている。リサイクルをテーマにしたモニ ター会議でエコ—広場館を見学した感想は「徹底した活動に感動！」…
1999(H11).6.5	東京新聞	<1999東京環境リーグ Vol. 2> 『夢みるゴミ』 愉快的時間が生まれてる／6月5日は『環境の 日』／“不用品に命を吹き込む”人々—北区リサイ クラー活動機構(東京都北区)	27年前のきょう、環境問題をテーマにした初めての世界規模での会議がストックホルムで開か れた。<中略> 私たちにとって最も身近な問題と言える“ゴミ”だが、知恵と工夫を凝らしつつ “ゴミと遊ぶ”人々がいる。楽しいアイデアに満ちたその活動ぶりを紹介する。JR田端駅北口か ら高台通りを歩いて約8分、富士見橋エコ—広場館がある。北区のリサイクル活動拠点であるこ こにはたくさんの人が集い、家庭の不用品やゴミを蘇らせたり、ときには環境問題について学び つつ、インターネットを通じての情報発信も行うなど元氣一杯の施設だ……
1999(H11).8.22	上毛新聞	<生活—くらしの経済> 食卓に「安全」届ける／ 甘楽町有機農業研究会／野菜のリサイクル確立 —全国から視察相次ぐ	※コピー用紙(感熱紙)劣化により本文判読困難 <小見出し>28人に呼びかけ11年前スタート／連作障害なく元氣に育つナス／宅配便には生 産者の顔写真



掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
1999(H11).12.19	読売新聞	ごみ減量、再資源化の拠点—第1号「エコライフかながわ」オープン／パネル討論会で活用法探る／リサイクル 楽しく体験—目玉は「工房」—子供も勉強OK	ごみの減量化とリサイクルを推進するための拠点となる横浜市の「神奈川リサイクルコミュニティセンター」(愛称:エコライフかながわ)が11月27日にオープンした。今月10日には同センターで環境問題の専門家や市民らによるパネルディスカッション「市民の手で進めるこれからの環境・リサイクル活動」が開かれた。全国初の市民運営型リサイクル施設「富士見橋エコ広場館」からパネリストとして参加の竹腰代表は「市民はもっと汗を流さないといけない」「リサイクルは“おもしろい”という視点で取り組むことなどアドバイスした。
2000(H12).2.・・・	朝日新聞	エコライフははじめの一步—一日のゴミの重さを量ろう／手間かけずにヘルシー料理／地域ぐるみで「リサイクル」／エコ・ショップたばた村	2月は省エネ月間。便利さや快適さに流されがちな日常を省みるいい機会だ。…。「資源がぐるぐる回る循環型社会には、環境、経済だけでなく、人や情報との出会い(エンカウンター)が不可欠。私たちの理想はエコライフを一步進めたエコライフなんです」と話すのは北区リサイクラー活動機構の竹腰里子代表だ。〈中略〉 エコロジーとエコノミーがエンカウンターをきっかけに、こだまのように広がる。それが竹腰さんの目標だ。(富士見橋エコ広場館の紹介のほかに、川崎・ごみを考える市民連絡会や東京ガスのエコ・クッキング講座の記事も…)
2000(H12).6.24	京都新聞	エコ活動で地域づくりを—中京で交流集会—／住民主体の事例紹介	「地域における環境活動交流集会」が23日、中京区の京都アスニーで開かれた。京都市が中心となって6月の環境月間に開催しているイベント「環境まちづくり交流会in京都」の一つ。はじめに「エコ(環境)意識がエコ(共鳴)する地域づくり」と題して東京都北区リサイクラー活動機構の竹腰里子代表が基調講演した。そのなかで代表は「老若男女を問わず、いろんな住民が拠点に集まり、自分の出来ることを生き生きとやっている。私たちの活動はリサイクルを切り口にしたコミュニティづくりともいえる」と述べた。
2000(H12).10.20	日刊工業新聞	〈首都圏リポート〉「リサイクル生活文化」の創造を—東京・北区リサイクラー活動機構—／展示や販売 多彩な活動／地域ぐるみで取り組み 企業との協力関係も強化／暮らしを見直す／対立から“協働”へ	「リサイクル生活文化」の創造を—。こんな掛け声とともに北区リサイクラー活動機構が不用品の引き取り、再利用からリサイクル品の展示・販売、情報交換、学習まで多彩な活動を繰り広げている。特筆すべきは企業との協力関係—「少しは見えてきたように思う」と同機構の竹腰代表。モノを使いまわすという発想自体、企業の論理と相反する部分があるが、環境問題が深刻化する中、その関係も対立から対話を経て今は協働の段階に差し掛かりつつあるとの認識だ。専門的な知識・技術を持つ企業の力があって初めて実現できることが多いのだ。
2001(H13).11.5	静岡新聞	〈>ゆうゆうシニア> 廃油利用したせっけんや家電修理…リサイクル活動に奮闘／施設を拠点に地域づくり	東京都北区の「富士見橋エコ広場館」は、市民組織が運営するリサイクル活動の拠点となっている。家電製品の修理や廃油を利用したせっけん作りなど、資源を大切に使う多彩なプログラムに、多くの高齢者が生きがいを感じている。せっけん作りをしているのは元中学校教師の山崎寛さん、理科を教えていた経験を生かしてオープン当初から活動に参加している。懐かしい昭和三十年代のお勝手と茶の間を再現した一角で、リサイクル手芸を担当するのは藤澤秀子さん。また、家電製品や傘などの修理を請け負うリサイクル達人コーナーも人気スポットだ。
2001(H13).11.19	河北新報	〈くらし—老いも若きも〉 リサイクル シニア活躍—東京・富士見橋エコ広場館—／廃油せっけん、家電修理—地域貢献に生きがい—	同上(全く同じ文章と写真)
2001(H13).11.29	新潟日報	〈シニア〉 リサイクル活動に汗—多彩な内容で自己実現—	同上(全く同じ文章と写真)

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
2001(H13).12.5	福島民報	東京・北区の富士見橋エコ広場館／シニアパワーでリサイクル活動／地域と生きがいづくり	同上(全く同じ文章と写真)
2002(H14).8.27	毎日新聞	<企画特集 毎日国際交流賞> エイズ撲滅へ地道な歩み(受賞者:アフリカ友の会代表 徳永瑞子さん)／経済疲弊が感染へ拍車／啓発指導に受講生も真剣／自立支援にも尽力	毎日国際交流賞を受賞した徳永瑞子さん(アフリカ友の会代表、東京都北区)の活動が紹介されている。受賞理由は次の通り。「アフリカ大陸のエイズ感染拡大が世界的な問題になる中、最貧国の一つである中央アフリカ共和国で、10年間にわたりエイズ予防教育や医療活動を進めてきた。不安定な政情ながら、現地スタッフを継続的に養成。貧困のため公的医療を受けられないエイズ患者のために診療所を運営し、訪問看護など親身なケア活動を実施。洋裁技術を教えるなど自立支援にも力を注いでいる。」
2002(H14).8.29	朝日新聞	「安い・オシャレ」人気定着し品薄／古着「安定供給」へ組合／来月設立総会	高まる人気の一方で品薄に悩む全国の古着店が今秋、日本古着小売業協同組合をはじめて設立する。組合を通じて、古着の回収量を増やすのが目的だ。自治体などで回収する衣料品のうち国内で古着として再生するのはわずかに0.2%。この3倍から5倍は再利用できるはずとそろばんをはじく。古着店は零細企業が多く、個々に仕入れを増やすのは難しい現状。また、品薄になっても古着を作るわけにはゆかず、組合の共同購入などをすすめて衣料品のリサイクルを拡大したいとしている。
2002(H14).9.・・	朝日新聞	壊れた家電 捨てずに修理／編集部員が16点、専門店に頼ってみました／まずまず納得、課題は部品代／愛着ある品は「満足」／ごみにしたくない	家電製品が壊れたら修理して使う—それが当たり前だった時代はずっと遠くなったような気がする。何せ新品でも安くなったし、めったに壊れないせいか修理に出すには手間がかかる。買い換えた方が確かに手っ取り早い。だが、捨ててしまえばごみになる。世の中、ごみ問題だって深刻だ。そんなところに、家電修理を専門にする店が出てきた。「割に合う」値段とサービスが売り物だという。実際にどんなものか、編集部員の家にあった壊れた家電を集めて修理に出してみた。……
2002(H14).9.・・	朝日新聞	挫折しない堆肥作りは？／5つの方式を比較／利用者が1年かけ調査／処理物に土混ぜ熟成を—都が2機種を商品テスト	ごみの減量をめざし、家庭の生ごみからの堆肥づくりを推進する自治体が増えているが、知識不足から挫折する人が少なくない。上手な作り方を広めていこうという試みが始まった。東京都江戸川区は昨年、利用者同士が工夫し、情報交換する場を作ろうと手法別にチームで取り組む「リサイクル実践モニター制度」を始めた <中略> 指導した富士常葉大学の松田美夜子助教授(環境防災学部)は「それぞれの利点などを知ったうえで、自分に合う方法を探してほしい」と話している。
2002(H14).10.12	毎日新聞	第14回毎日国際交流賞 受賞記念講演会／心打つ「献身」／アフリカ友の会代表 徳永瑞子さん／中央アフリカ共和国—エイズよりも怖い飢え	市民レベルの草の根国際交流・協力活動を顕彰する「毎日国際交流賞」の受賞記念講演会が毎日新聞大阪本社オーバルホールであった。……個人受賞の東京都北区、「アフリカ友の会」代表、徳永瑞子さんは「アフリカの仲間たち」と題して講演。アフリカ大陸のエイズ感染拡大の原因である深刻な貧困を訴え、約500人の聴衆はその健新的な活動に深く心打たれた。徳永さんは最後に、受賞の記念に診療所に憩いの家を作り「毎日交流の家」と名付けようと考えていると述べた。
2002(H14).10.18	読売新聞	<えこらいふ> 陶磁器“砕いて焼き直し”リサイクル／素朴なデザイン・強度は不変・名産地に拡大	家庭で欠けたりした陶磁器の食器を回収して茶わんなどに再生する試みが、岐阜県など焼き物の産地で広まっている。百貨店やリサイクル活動に取り組む市民団体などが回収に協力。再生品は都内の雑貨店などの店頭に並び、素朴なデザインと手ごろな価格が人気だ。北区リサイクル活動機構(東京)も2002年1月、一日で約30キロ分を回収した。理事長の竹腰里子さんは「ごみになるため捨てられなかったもらい物などの食器が次々と寄せられた」と話す。陶磁器のリサイクルは不可能だと考えられていただけに意義ある取り組みだ。

掲載年月日	掲載紙(誌)名	見出し	記事内容
2002(H14).10.19	読売新聞	<家庭とくらし欄> 人形に見る昭和初期の暮らし／あす20日まで都内で展示	昭和十年代と二十年代の暮らしを表現する人形展「あぜみちの詩」が東京・王子駅前の「北とびあ」7階で開かれている。リサイクル活動に取り組むNPO法人北区リサイクラー活動機構が、資源を大切にしていた時代の暮らしを知ってもらおうと企画した。兵庫県の人形作家・渡辺うめさんの作品約30点。着なくなった服や布団綿などを使っている。同活動機構理事長の竹腰里子さんは「人形に、日本人の暮らしの原点を見る思いがする」と語る。入場無料。
2003(H15).6.15	東京新聞	<みんなで環境にやさしいエコ社会> よみがえる廃棄陶磁器―「GL21」広がるリサイクル活動―／壊れた食器 全国から回収～粉碎して再生／環境に気を配り デザインも好評	不燃ごみとして埋め立てられてしまう陶磁器を、器としてよみがえらせよう！―。岐阜県多治見市など東濃地方の美濃焼産地が取り組む「グリーンライフ21プロジェクト(GL21)」の活動が全国に広がっている。「美濃り食器」と名付けられたリサイクル食器を調べた。GL21は、東濃地方の製土、製陶のメーカーや卸問屋、研究機関など31社・団体で構成している。発足したのは1997年。岐阜県セラミックス技術研究所の研究員は「デザインもできるだけシンプルに。使いやすく、洗いやすく…を心がけている」と話す。
2003(H15).7.7	北部朝日 (東京ほくぶあさひ)	古着・古布業界は出口なし／アジアの国々から閉め出され／工業用雑巾・フェルトも期待薄	練馬区は昨年からは行政が中心となって古着・古布の回収を始めた。板橋区は回収業者との交渉を含めて町会・自治会まかせで行政回収は考えていないという。この中間方式をとっているのが北区。回収拠点を6か所設けているが運営は民間のボランティア団体。NPO法人北区リサイクラー活動機構理事長の竹腰里子さんはエコ広場に持ってくる古着を「木綿・絹は、裂いて織り直しバッグなどを作ったり、古着としてばさーに出したり、全てのものをもう一回使ってみよう」と工夫している」という……
2003(H15).・・・	朝日新聞	<疑問解決モンジロー欄> 買うより高い？家電の修理／修理料一定 新品お安く／いいものを大事に使おう	家電製品の修理料金は平均1万円前後で、ラジカセなどの比較的低額商品では新品よりも割高という“疑問”が…。新品の値段が安くなるのはうれしいが、使い捨てを繰り返していたら地球の危機が……。！東京都内の「北区リサイクラー活動機構」。ボランティアで修理をはじめて10年以上という中一訓さんは、家電でも時計でもカメラでも何でも直しちゃう。「自分で修理したいという人の相談にのる活動だったのに、直してくれという依頼ばかり」と苦笑する。また「ちょっとした気遣いで故障は防げる。少し高くてもいいものを大事に使うべき」とも…
2004(H16).4.19	日本農業新聞	学給残さで循環型農業／東京都北区「NPO」×群馬県甘楽町「農家」／環境教育生かす―行政も後押し	群馬県甘楽町の農家と東京都北区のNPO法人が中心となり、双方を舞台にした循環型農業が注目されている。民間が活動の主役となり行政が後押しするやり方が好調の秘訣だ。北区では1996年に区内の全小中学校に生ごみ処理機(1台343万円、ランニングコスト年20万円)を導入した。リサイクル清掃課の高田係長は「生ごみとして捨てたほうが安上がりだが、それ以上に子どもへの環境教育効果が大きい」と話す。この仕組みを支える北区リサイクラー活動機構は、平均年齢60歳の会員たちがバザー等で運送費を稼いでいる……